



国立大学法人
長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY

Nagasaki University Choho

人を結ぶ 地域と繋ぐ
[長崎大学チョーホー]



Web
Choho

Vol.88

2025年7月1日発行

「人を結ぶ 地域と繋ぐ」をコンセプトに、長崎大学の思いや姿、描く未来などを共有し、多くの皆さまに長崎大学へ関心をお寄せいただけるような広報紙を目指します。

1



Peace

継承と行動

被爆80年 長崎大学の使命

長崎大学は医科大学として世界で唯一、被爆を経験した歴史を継承する大学です。だからこそ「地球の平和を支える科学を創造すること」を理念に掲げ、原爆後障害医療研究所、核兵器廃絶研究センター、グローバルリスク研究センターなどを基盤として、人々が平和に共存する世界を実現するという積極的な意志の下に教育・研究を行ってきました。

しかし、戦争や原爆を体験した世代の高齢化は進み、被爆や戦争の体験の継承が切実な課題になっています。そして世界各地で戦争が起き、核兵器使用の脅威も高まっているのが実状です。

そこで、長崎大学は戦後・被爆80年となる2025年を「継承と行動」の年と位置付け、幅広い世代を巻き込んだ活動を展開することとしました。「核なき世界の実現」「長崎を最後の被爆地に」という使命の完遂に少しでも近づくべく、未来に向けて何をすべきか考え、行動してまいります。

長崎大学長 永安 武

アマチュアスポーツの力で 新しい継承のアクションを起こす

昨年は練習試合とも公式戦とも違う雰囲気の中で、試合に臨むことができました。格上を相手に自分たちの弱さを痛感させられる結果でしたが、それ以上にお互いが初めての平和親善試合に意味を見出すことができたと思います。



長崎大学サッカー部 監督
田中 朴通さん

長崎大学教育学部出身。長崎南山中学校・高等学校で教鞭をとる傍ら、生徒会主任として同校の平和学習も担当。長崎大学サッカー部の監督には大学4年時に就任し、今年9年目を迎えます。

長崎南山中学校・高等学校の教員でもある田中監督は、学校では平和教育を担当しています。「被爆者の記憶や想いを辿るのが困難になる時代が近づいているのではないか」。そう考えると同時に、これからの平和活動や継承の在り方について模索しています。「長崎大学の学生が原爆の脅威に触れ、平和について考える機会が少ないとも感じていました。若い彼らにとって『平和』は、概念を掴むのが難しい答えの見つからないテーマです。その一方で、自分たちの足元を見つめてみると、長崎大学があるのはかつて兵器工場だった場所でもあり、今ここで学んでいる一人として、平和とは何か継承の在り方を見つめなお

すことはとても有意義だと思います」。スポーツを通じて、平和への想いを表現する場を創造したい。昨年、田中監督の提案を受けた部員たち、そして広島大学サッカー部の上泉康樹監督の賛同も得て、第1回目の平和親善試合Peace Matchが実現しました。試合前には、本学サッカー部の当時のキャプテンの素案をもとに、広島大学のキャプテンと共同で平和宣言文を作成。また、本学校兵器廃絶研究センター(RECNA)の樋川和子教授や田中監督の事前講義など、平和に関して理解を深めた上で試合に臨んだそうです。「非核や不拡散など、平和問題にはさまざまな観点がありますが、事前

学習を通じて“当たり前”の日常が当たり前ではない”ということに気づかされた、彼らなりの平和宣言文になったと思います。私たちにできるのは、スポーツの力で他者とつながりを持ち、そのつながりを大事にしていくことです。ゆくゆくは海外の大学など世界中に輪を広げて、すそ野を広げたいですね。それこそが、アマチュアスポーツの世界に身を置く私たちだからこそ実現できる、異文化交流としての平和活動だと思います」。8月20日、長崎スタジアムシティピーススタジアムで開催される第2回の平和親善試合Peace Match。昨年以上の盛り上がりが期待される中、田中監督もサッカー部の皆さんも



昨年広島で行われた大会の様子。九州大学サッカーリーグ3部への昇格を目指している本学サッカー部の皆さんは、学業の傍ら早朝と夕方の2回に分けて練習を行っています。

練習や準備に余念がありません。「平和について共に学び、さらに親睦を深めていきたいですね。小学生や中学生、高校生、仕事終わりのお父さん、お母さん、観光客、スポンサーの皆さんなど、大勢の観客でスタジアムをいっぱいにしたいです。多くの人に足を運んでいただけるイベントにしますので、ぜひ注目してください」。

一生に一度の経験を 実りあるものに

戦争や原爆を体験していない若い世代が、共にピッチに立ち平和を発信するPeace Match。チームを率いるキャプテンの近藤さんは福岡県出身。「小学生の頃に修学旅行で長崎の原爆資料館を訪れたきり、中学と高校では戦争や原爆について耳にしたことはあっても、深く考えたことはなかった」と話します。そんな中、昨年参加したPeace Match開催前の事前学習は、印象に残る経験になりました。「講義を受けた後にみんなで核兵器について議論しました。自分と同じように核保有は良くないと考える人がいる一方で、抑止力になると考えている人もいました。僕自身の考えが変わる訳ではありませんが、Peace Match

がなければ核兵器という重いテーマについて意見を共有する機会もなかったと思います」。今年の事前学習には広島大学の皆さんが参加予定。近藤さんは「迎える立場として、僕たちもさらに学びを深めたい。皆さんと平和について、語り合う時間が持てると思いますね」と抱負を語ります。大会に向けて楽しみにしているのは、どのようなことでしょうか。「やはりピーススタジアムで試合ができる、それが一番楽しみです。一生に一度しかない貴重な経験になると思います。昨年より部員数は少ないのですが、一人ひとりのつながりが深まるようなプレーを意識して練習に取り組んでいます。そして今年こそは絶対

他の部の皆さんと一緒に、長崎大学として平和を発信する一日にします。



長崎大学サッカー部
キャプテン
近藤 寛大さん
工学部4年

に勝ちます！フェアプレーを心掛けながら、観客の皆さんに楽しんでいただけるゲームにします」。

Projects

(2025年5月1日現在)

被爆80年 長崎大学「継承と行動」プロジェクト

核兵器廃絶研究センター(RECNA)核廃絶に向けた「対話」プロジェクト開かれた長崎2.0「平和のための 対話ビッグバン」に向けて期間／2025年通年
本学核兵器廃絶研究センター(RECNA)は、被爆80年におけるキーワードとして「対話」を選び、ウェブサイト「対話プロジェクト」を開設しました。ぜひご覧ください。



そのほかのプロジェクトはこちらをご覧ください！



対話と行動でつなぐ

Peace Match

2025.8.20
NAGASAKI × HIROSHIMA

第2回平和親善試合 **Peace Match**

開催日／2025年8月20日(水) 9時～19時30分(予定)
(プログラム詳細は長崎大学HPよりご確認ください)

会場／長崎スタジアムシティ PEACE STADIUM Connected by SoftBank、HAPPINESS ARENA(長崎市)

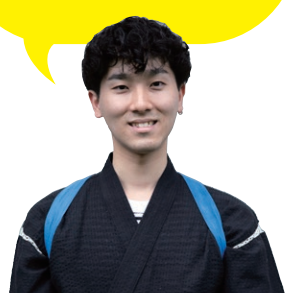
入場
無料

昨年広島で行われた、長崎大学サッカー部と広島大学サッカー部による「平和親善試合Peace Match」。被爆80年の今年は、広島大学を長崎に招いて開催されることが決定しました。被爆地にある大学の学生たちが、スポーツを通して考える平和。そこから見てくる、これからの継承の在り方とは？大会の発起人でもある、長崎大学サッカー部監督の田中朴通さんと新キャプテンの近藤寛大さんに今大会に臨む想いを聞きました。

感動と 気づきを届ける パフォーマンス

「ながさきピース文化祭(第40回国民文化祭)」の応援事業として開催するPeace Match。学内外で活躍する本学の書道部と龍踊部が、イベントに華を添える予定です。彼らは、どのようなメッセージを発信してくれるのでしょうか。『被爆80周年記念誌(長崎原爆被災者協議会発行)』の表紙の文字も担当した、書道部の林田さんに抱負を聞きました。「文字を通して何かを表現する時、私たちは学びを深める時間を大切にしています。事前に原爆資料館を訪ね、そこで感じた気持ちを表紙の文字に仕ように、Peace Matchに参加することが決まってからも、みんなで平和について考える時間を持ちました。部員の中には中国、マレーシア、韓国、オランダの留学生もいます。国籍や宗教が異なる一人ひとりが意見を出し合い、平和とは何か多様な角度から考える。そうすることで嘘のない文字を書けると思っています。Peace Matchでは、私たち大学生が考える平和や未来への希望、そして何事にも屈しない強い想いを筆先から伝えます。ここから歴史が変わる、新しい時代が始まる。そんな力強いパフォーマンスを披露します」。

パフォーマンスのテーマは
“愛と平和”。
6メートル×3.5メートルほどの
作品を書き上げる予定です。



書道部部长
林田 響さん
教育学部3年

“言葉ならざる声”をつなぐ

被爆遺構

爆心地から500～700メートルの距離に位置する坂本(医学部・歯学部)キャンパスには、かつて長崎医科大学(長崎大学の前身のひとつ)の基礎キャンパスと臨床キャンパス(現在の長崎大学病院)が置かれ、多くの優秀な人材が学んでいました。被爆から80年。坂本キャンパスに残る被爆遺構や保存資料から、当時の凄惨な状況や原爆の脅威が見えてきます。

解説 長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA) 山口 響 特定准教授
長崎県立大学、活水高等学校等でも非常勤講師として核や原爆の問題について講義を行う。

本学では、
被爆資料の収集および
保存と検証活動が
行われています。



山口 響
特定准教授

1 記念碑と銘板

坂本キャンパスの中庭には、長崎医科大学の教職員や看護婦、学生など、原爆死没者を悼む記念碑と銘板が建立されています。現在判明している死没者数は898人。木造校舎が多く、特に被害が甚大だった基礎キャンパスにいた教職員と学生が犠牲者の大半を占めます。戦況が悪化する中、一人でも多くの軍医を戦地に送り出すために、通常は夏休みであった時期にも関わらず講義が行われていました。



銘板



2 ゲストハウス(旧配電室)

爆風と熱線によって一瞬で焼け野原になった基礎キャンパス。被爆当時、配電室として使われていた建物は、数少ない鉄筋コンクリート造りで焼失や倒壊を免れました。原爆が投下された直後は、ほかにもいくつかの鉄筋コンクリートの建物が残っていましたが、現在残るのはこの一棟のみです。



4 2人の学長の胸像

病院で被爆し重傷を負った角尾晋学長は、調来助教授らの手当てを受けながら、8月22日に息を引き取りました。ほかにも救護活動にあたるはずだった多くの人材が命を落とし、事前に編成されていた11の医療隊のうち、調教授の第6医療隊と永井隆博士の第11医療隊しか活動できませんでした。

角尾学長亡き後学長に就任し、大学の再建に力を注いだのが古屋野宏平氏。被爆直前の7月、市街地から田園風景の広がる城山地区へ疎開したことで結果として爆心地の近くへ寄ってしまい、自宅にいた妻を原爆で失います。そうした中、焼け野原になった大学で懸命に救護活動にあたり、その最中に敗戦の報せを聞きました。



角尾晋学長像



5 旧通用門の門柱と基礎

新興善国民学校(現在の長崎市立図書館)や大村海軍病院などでの救護活動が続く中、焼け跡になった基礎キャンパスは、たくさんの遺体が放置されたまま、住む家をなくした人々が雨露をしのぐ場所になっていました。しかし、米軍の命令によって、1945年10月頃から徐々に整地が進められ、多くの遺構が地中に埋められたのかもしれない。

2024年1月、「旧通用門の門柱と基礎」が、敷地内ののり面の工事中に発見され、旧正門の門柱と同様に原爆の威力を伝える遺構として、新たに「長崎市被爆建造物等の取り扱い基準」のAランクに登録されました。

6 グビロが丘

戦後に長崎へ復員して来た医学生の中に、巡回診療隊を結成した人たちがいました。看護婦とともに1945年9月末から近辺を回って、被爆者の治療にあたった彼ら。医師資格を持たない医学生が多かったため1カ月弱で解散してしまいましたが、その間、多くの傷ついた人々を救ったと言われています。彼らは、「グビロが丘」と呼ばれる坂本キャンパスの裏山に、友人たちの鎮魂を目的に杉の木で作った簡素な慰霊塔を建てました。のちに、倒壊した旧大講堂の礎石を使った慰霊碑が完成しました。



7 キュンストレーキ

展示場所：附属図書館医学分館

長崎大学附属図書館医学分館では、永井隆博士による「原子爆弾救護報告」や調来助教授らによる「原子爆弾災害調査票」、「遺骨引渡一覧表」など、原爆関連の貴重な資料を所蔵しています。

キュンストレーキ(人体解剖紙製模型)は、本学の始まりとなった西洋医学の伝習の中で人体の仕組みを学ぶ教材として輸入され使われたもので、後に解剖学教室の標本室で保管されていました。原爆投下直前に佐藤純一郎助教授(当時)が、戦災から貴重資料を守るため、鉄筋コンクリート造の図書館書庫(2階)へ移動させたことで、模型の右半身だけが残ります。書庫の図書・雑誌は焼失し、1945年5月ごろに佐賀県鹿島に疎開させていた古医書などごく一部の資料が残されただけでした。

現在キュンストレーキは、戦後80年を経て損壊の恐れがあるため、X線検査を用いるなど保存に向けた検証が急がれます。

10 運動場通用門跡

戦時下では、男子医学生も医師として出征しなければならず、運動場は軍事教練の場になっていました。

出張先の東京から長崎に戻る途中、広島の惨禍を目撃した角尾学長は8月8日、この運動場に教職員と学生を集めて警戒を促しました。また、急遽教授会も開き、10日から全ての講義

を中止することが決まっていたそうです。運動場の脇にひっそり佇む旧通用門は、原爆により片方の門柱が倒壊。右側の門柱のみ現存しており、被爆遺構として保存されています。当時の大学は、現在のように気軽に入ることができる場所ではなかったのでしょうか。解剖学の講義中に爆死した小野直治助教授は、いつも本を読みながらこの門が開くのを待っていたそうです。

長崎大学の貴重な歴史資料を後世へクラウドファンディングにご協力願います

本学には、このように被爆の実相を物語る貴重な資料が数多く所蔵されていますが、年月の経過とともに劣化が進んでいます。これらの資料を適切に修復・保存し、未来の世代へと継承するため、クラウドファンディングを通じて広く支援を募ること

をいたしました。集まった資金は、専門家による調査・修復作業、保存環境の整備、展示・公開のための設備導入などに充てられます。本プロジェクト達成に向けて、皆さまのご支援をお願いいたします。

プロジェクトで 修復・保存を目指す 被爆関連資料	⑤⑤ 旧正門と旧通用門の門柱
	⑦ キュンストレーキ(人体解剖紙製模型)
	⑨ 西森一正氏の血染めの白衣

- 実施時期：実施中～2025年8月22日(金)
- 目標金額：800万円(各資料の修復・保存に必要な費用を基に設定)
- 実施方法：クラウドファンディングプラットフォーム「READYFOR」を通じて実施



9 西森一正氏の血染めの白衣

長崎医科大学の4年生だった西森一正氏は、臨床キャンパス(附属病院)の皮膚泌尿器科外来で臨床研修中に被爆しました。この白衣は、その時に身に着けていたものです。診察室は爆心の反対側にあったため命拾いましたが、付着した血痕から多量のガラス片を浴びたことが分かります。また、背中あたりに血痕が多く見られるのは、窓を背に立っていたからでしょう。

西森氏は被爆3日後の8月12日に自身の無事を知らせるため、下宿先の市内伊良林から高知にいる父親にハガキを出しました。検閲にかかる箇所は伏字にした上で、軽傷であることや9月末に陸軍軍医校に入校予定であることなどが綴られています。

展示場所：長崎大学医学ミュージアム原爆医学資料展示室(見学可)
開館時間：9時～17時
休 館 日：土日、祝日(7-8月は開館)、12/29～1/3



さまざまな
苦難を乗り越え、
現地に医学部が
再建されました。



原爆後障害医療研究所提供
米国AFIP返還資料 NG142～NG144
1945年10月中旬 撮影 林重男

URA

University Research Administrator

ユニバーシティ リサーチ アドミニストレーター

大学において研究者の研究環境整備や、研究開発マネジメントの強化などを担う専門職です。研究戦略立案、外部資金の獲得支援、共同研究相手のマッチング、研究プロジェクトの運営管理、研究成果で生み出された知的財産の管理・活用、研究の国際化に伴う安全保障管理など、業務は多岐にわたります。研究者と事務職員に加え、大学における第三の職種と呼ばれている新しい仕事です。長崎大学では14名ほどのURAが在籍し、長崎大学の研究力の強化、研究活動の活性化を図り活躍しています。

Research

[研究]



研究に関する情報は
こちらからも
ご覧いただけます。



URAが推す長大の研究

取材・執筆：松田法恵 URA
研究開発推進機構 海外グラント・外国人研究支援部門長

ロボットとの共生で 皆が幸せになる 未来を創る



長崎大学病院 精神科神経科 科長 熊崎 博一 教授

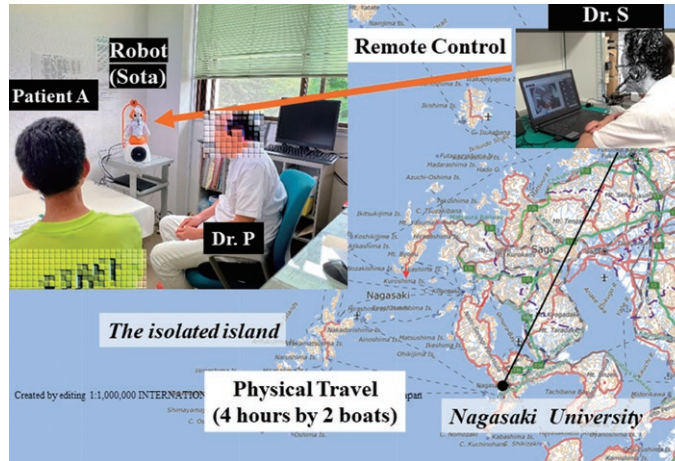
常に重要です。また、ロボット診療を受ける患者さんの心の準備も大切です。熊崎教授は、ロボット診療を受け入れてもらうために、予めロボットの特徴をしっかりと説明することを行います。今後は、満足感や安心感、そして

治療効果

のバランスを大切にしながら、ロボットによる診療を改良し、患者さんに合わせた「個別化」も進めていく必要があると言えます。ただし、全てをロボットに任すのではなく、ロボットと人、それぞれの良さを「使いこなすことも大事」だと熊崎教授は考えています。

遠隔診療に使われているこの技術は、4月から行われている大阪万博でも活躍しています。いのちの未来館では、長崎から遠隔でCGアバターを操作し、精神疾患をもつ患者さんがリアルタイムで受付業務を行っています。普段なら誰もが緊張してしまうような場面でも、アバターを介することで参加しやすい環境が作られているのです。

このように、ロボットを介することで誰もが、何処にいても社会からのサポートを受けることができ、また社会に参加することができる時代が近づいています。いつでも隣にロボットがいる世界が、もうすぐ訪れるかもしれません。



以下より引用

Kawahara H, Kanchi N, Kawata M, Yoshikawa Y, Baba J, Muramatsu T, Ishiguro H, Kumazaki H. Training potential of a teleoperated humanoid robot for use by a young psychiatrist during childcare leave. PCN Rep. 2024 Sep 8;3(3):e70008. doi: 10.1002/pcn5.70008. PMID: 39253714; PMCID: PMC11381314.



長崎県は日本一島が多く、1479もの離島を有します。豊かな自然や独特の文化など、多くの魅力を有する離島ですが、その一方で、医療従事者の不足、医療アクセスの制限等のさまざまな課題も抱えています。今回は、これらの課題に対し【共生】をテーマにロボットやAIの技術を活用して取り組んでいる長崎大学病院の熊崎博一教授にお話しを伺いました。

多様な業種でロボット・AIの導入が進められていますが、医療の分野における応用もその一つです。現在、ビデオ通話が主流の遠隔診療にロボットを使うメリットは大きいと熊崎教授は語ります。ロボットは実体が診察室にあるので、患者さんは、まるでそこに医師がいるように感じることができます。また、熊崎教授が使うロボットは身振り手振りや体の向きを変える動作が可能です。これにより、非言語的コミュニケーションが豊かになり、ビデオ通話よりも信頼感を高めやすいという特徴もあります。

また、医師と患者さんが対面する場合、仕草や表情に、お互い何か意味を見出そうとしてしまい、それが診察に影響を及ぼすこともあるそうですが、ロボットを介することでそのような懸念が少なくなります。このように、ロボット・AIの導入は、遠隔診療がどうかに関係なく、従来の診療にはなかったメリットも生んでいます。将来的には、病気の説明や治療の選択肢の提示など業務の一部をAIに任せることで、医師がより対話の時間に専念できる環境を作れるのではないかと熊崎教授は考えます。

もちろん、ロボット・AIの導入には課題もあります。限られた人員で対応できるよう、誰もが簡単にメンテナンス、操作ができるようにすることは非

Saiyu Fund

[西遊基金]

寄附に込める想い

銘板が語り継ぐ 親子のチームワーク

瀬戸内海に浮かぶ愛媛県今治市は、^{は かた じま}で生まれ育った私は、中学卒業と同時に親元を離れ、今治市内の高校に入学しました。自分一人で衣食住を整えながら受験勉強に励み、長崎大学の歯学部へ合格。その頃私の父は海運会社を経営しており、たくさんの船員を五島列島から雇用していました。「医歯業は難しい」。そう言われた時期を乗り越え歯学部へ合格できたのも、父の代から続くこの長崎とのご縁が味方してくれたからでしょう。私にとって長崎大学は運命の大学になりました。

歯学部は職人的な技術を磨く実習が多く、それらをつつひとつクリアしていく中で自分に向いている治療技術や心掛ける点などを、明確にとらえることができました。しかし、不

器用だった私はこの実習で合格するまでに時間がかかり、夜遅くまでラボに残って作業する日も度々。モノづくり以外の分野で成果を出すしかないと思いながら、頑張っていました。また卒業を控え、予防歯科の研究に興味を持った時期もありました。高木興氏教授(当時)が主宰する予防歯科学講座の見学に行きましたが、高木教授は私が研究を継続できるか半信半疑のご様子でした。他の大学の講座も視野に入れ、頑張り抜けるか悩んだ末、大学院生がコンピューターにデータを次々入力する姿を見て、やはり研究職は自分には不向きだと実感し、臨床の道に進むことにしました。

その後、愛媛大学の勤務医時代、長大歯学部愛媛県人会が発足しました。1期生の先輩や先生方が集

1996年 歯学部卒業

今岡美佐子 ^{さん}



昨年6月から、岡山大学予防歯科学講座(江國大輔教授)で学究に励んだ今岡さん。三度目の飛躍を叶え「コツコツと頑張ってきたことを、これからの人生計画にしっかり役立てていきたい」と話します。

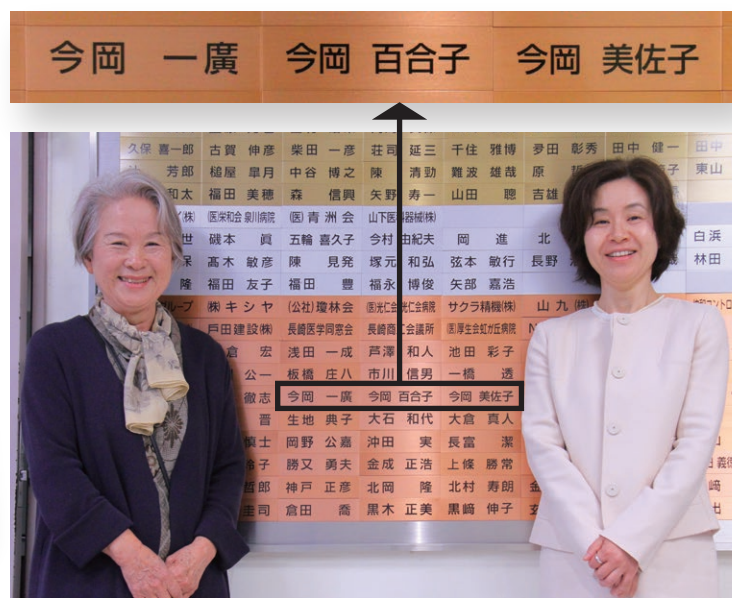
まりお互いに語り合う小さな会から始まり、11期生の私もその輪の中に加えていただきました。「参加するだけでも立派だよ」とおだてられながら、いそいそと出席していたものです。会の名称は「おくんち会」と言います。龍踊会、西遊記の会、長大会など複数の候補の中から、私が考えた名称にあみだくじで決まりました。

伯方島で「今岡歯科」を開業して早いもので21年。患者さんのほとんどが治療に向かっています。大学時代に歯学部の先生方からご指導いただき、国家試験に合格できたおかげで、小さいながらも自分の病院を持つチケットを手に入れることができたと感じています。特に人口約5000人の小さな島で、総合歯科医として島民の健康を守る過程では、大学時代に学んだ離島医療の知識が下地になったと思います。

昨年11月、開業20周年の節目に両親と西



成人の記念に親子3人で撮影した一枚。



父・一廣さん、母・百合子さん(写真左)と並んで名前が刻まれている西遊基金寄附者銘板(文教キャンパス)。「ここに親子3人の名前が残ることを、今回長崎に来ることができなかった父が一番喜んでいます」と美佐子さん。

卒業生イマナニシテル!?

卒業生の思い出や現在の様子を知ることができる「卒業生イマナニシテル!」が「Web Choho」限定で公開されています。皆さまのお知り合いが登場するかもしれません。また、記事投稿も随時募集しております。ぜひご覧ください。



<https://choho.nagasaki-u.ac.jp/tag/alumni/>

西遊基金



「西遊基金」は、長崎が長年にわたって培ってきた個性と伝統を基盤に、地域の発展から地球規模の課題まで、さまざまな問題を解決するための傑出した人材育成を目指した、長崎大学独自の修学支援と、教育・研究の幅広い支援を目指した基金です。TEL:095-819-2155

思い出の場所
募集中!

私たちの思い出の場所 たこやき道場 峯幸里さん

生まれ育った住吉の活性化に力を注ぐ

肉やツナマヨなど、たこ以外の具材も選べるたこ焼きを主に、お好み焼き、やきそば、そして地域活性化の一環として、長崎の郷土料理「浦上そばろ」も提供しています。

創業は1997年8月8日。現在は住吉中央公園前の路面店で営業していますが、最初は電車通りに面したビルの2階からスタートしました。目の前のテーブルで調理されたアツアツのたこ焼きをイートインできる店は、長崎では珍しかったと思います。大阪に同業態のたこ焼き店があり、それを知った母の提案で始めてはみたものの、

私自身料理は初心者だったため、経験のある弟に教わりながら仕事を覚えていきました。

また、商売を始めた頃の私は2歳と若く、アルバイトの長崎大学の学生とも年齢が近いので、仕事終わりにボウリングや食事に出かけるなど、まるで兄弟のような近い距離感で接していたと思います。もちろん上司の威厳はなかったでしょう。今となっては笑い話ですが、アルバイト学生と仕事に言い争いのケンカになり、お互いに口をきかなくなったこともありました。

その後学生とは、震災・災害支援のチャリティマルシェや住吉商店街のパトロール、店頭ワゴンセールをサポートなど、ボランティア活動を通じてお付き合いが深まった時期がありました。人のために何かをしよう。そんなふうを考え行動に移す皆さんの姿を、「素晴らしいな」と感心しながら見ていたもの



アツアツ、トロトロのたこ焼きは明石焼きのように出汁(左上)に浸して食べることもできます。左下は1500年後半にポルトガル人宣教師が伝えたといわれる「浦上そばろ」。地域活性化に取り組む峯さんは「NPO法人浦上そばろ保存会」を立ち上げ、浦上そばろの普及活動にも励んでいます。



です。

残念ながらコロナ禍を境に、活動を共にする機会はめっきり減ってしまいましたので、これからまた新たなご縁が繋がればと思っています。



作り置きをせず注文を受けてから作るたこ焼き。

アンケートのご協力をお願い

以下を明記の上、広報紙Chohoへのご意見・ご感想をお寄せください。

- ①面白かった記事
- ②本紙に対するご意見・ご感想
- ③今後取り扱ってほしい内容
- ④長崎大学からの情報発信全般についてのご意見・ご感想
- ⑤本学との関係
- ⑥年齢
- ⑦氏名(ふりがな)
- ⑧郵便番号
- ⑨住所
- ⑩電話番号



◎はがき：〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学広報戦略本部 宛て

◎FAX：095-819-2156 ◎メール：kouhou@ml.nagasaki-u.ac.jp

◎募集期間：2025年11月末まで

読者プレゼント

アンケートにご協力いただいた皆さまの中から、抽選で10名様に、長崎大学オリジナルQUOカード(500円分)をプレゼントします。賞品の発送は2025年12月を予定しています。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。



Choho

直接送付サービス
受付中!



広報紙Chohoはその多くを、各学部同窓会様の会報誌送付の際に、直近の号のみ同封してお送りしています。そのため、読者の皆さまには必ずしも毎号お届けできないケースがあり、「前号も読みたい」、「定期送付をしてほしい」といったお声をいただいております。そこで、ご指定の住所へChohoを直送するサービスを行っています。

上記サイトへアクセスしていただき、ご登録をお願いいたします。皆さまのご利用をお待ちしております。

送付先変更のご連絡はこちらまで



編集後記

被爆された方が少なくなる中、その惨禍の記憶をいかに継承し、平和を希求する行動へとつなげていくかは大きな課題です。そこで今号では、積極的な対話と行動でその課題に応えようとする若い世代の取り組みと、静かに80年前を伝える被爆遺構や資料、追悼碑に込められた物語の二つを取り上げました。

長崎大学と広島大学のサッカー部が昨年からはじめた「Peace Match」は、若い世代が核や平和について正面から向き合い、考え、語り合う場を創出しており、新しい平和活動の姿を提示しているのでは、と感じました。一方、坂本キャンパスに数多く残る被爆遺構等には、その一つ一つに言葉にならないメッセージやストーリーが刻まれています。大学が1945年8月10日をもって講義を中止する予定だったという話を聞いた時には、わずか1日の差が多くの学生たちの運命を決めたことに胸が締め付けられずにはいられませんでした。

今、その遺構や資料の傷みが進んでいます。なんとかこれら貴重な歴史資料を後世に残したく、クラウドファンディングを企画しました。ぜひ、皆さまのご支援をお願いいたします。

なお、この度ジャパネットホールディングス様に多大なご協力とご支援を賜り、ピーススタジアム内での撮影をご承諾いただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(広報戦略本部 松井史郎)

長崎大学SNSサイト



X



Facebook



Instagram



YouTube